

北里大学八雲牧場を訪ねて

— 北海道酪農発祥の地 八雲町 —

副会長 白崎博公



白崎副会長

盛岡地区懇談会前日の十月九日(金)に、北海道二世郡八雲町にある北里大学獣医学部付属フィールドサイエンスセンター八雲牧場を、PPA役員総勢二十八名で訪問いたしました。同月五日(月)に、周知の通り、北里研究所特別荣誉教授 大村智先生がノーベル生理学・医学賞を受賞され、ビッグニュースに、役員一同が沸き立つ中でのツアーとなりました。その喜びに溢れ返った反面、台風二十三号が滞在中に北海道東部へ最接近の見込となり、羽田空港から



の欠航も危ぶまれ、ノーベ

ル賞の傍ら、気象情報のニュースに釘付けでした。無事搭乗できた予定便も、若干の遅れでの函館着となりました。空港からは、チャーターバスで八雲町に向かいました。函館と室蘭の間に位置し、道内の酪農と木彫り熊それぞれの発祥の地として知られています。八雲の名は、当地の開拓を指導した旧尾張藩主の徳川慶勝が命名し、

素戔嗚尊(スサノオノミコト)が詠んだとされる「八雲立つ出雲八重垣妻籠みに八重垣作るその八重垣を」の日本最古の和歌に因みます。この由緒ある瑞祥地名よりも、俗のいわれである、「一週間七日のうち八日



という説明がむしろ直感的に響きます。(町の属する二世(ふたみ)郡は、二十一世紀に入ってからの新名称で、日本で唯一太平洋と日本海に接することに由来します) この八雲町の内陸部に、北里大学八雲牧場が広がります。面積は三七〇ヘクタール、東京ドームにして約七十五個という大規模な土地です。牧場に着くと教室に通され、センター長の寶示戸雅之先生より牧場の概要説明を受けました。約二三〇頭の肉用牛を自給飼料一〇〇%の草資源のみで肥育・生産しており、品種は日本在来種・およびフランス原産との交雑種で、いずれの牛も頑強で寒さに強い



のだそうです。説明の後の昼食は、職員の方の調理によるバーベキューでした。一年にほんの僅かしか出荷できない、幻の北里八

雲牛のしっとりとした赤身は、弾力がありながらもしなやかな味わいでした。現状では採算が厳しいそうですが、いつか日本全国の食卓に並ぶ日を夢見ながら、貴重な試食の機会を堪能し、贅沢なひと時を過ごしました。昼食の後、私達はトラックに乗り、

放牧地を回りました。台風が過ぎつつある、やや荒天の中、狭隘で未舗装の道を走るトラックは、非常に揺れました。必死にしがみつきながら振り落とされないように、霧に包まれた牧場を進みます。まるで、デイズニー・アニマル・キングダムに来たような雰囲気でした。場内はなだらかな丘陵状で、小川が流れ、こんもりとした森や、薬草研究のための畑もあります。途中で、職員の方が牛を呼ぶと、群れをなしてトラックまであつという間に駆け集まってきました。みんなカメラ目線で、こちらを向いてくれました。この牧場の特徴でもある堆肥舎にも訪問しました。牛舎での排泄物は、伐採チップなどと一緒に発酵させて堆肥へと加工します。堆肥の山を崩して触ってみると、臭いはなく、温かくなっていました。発酵により堆肥内は約七十度まで上昇しているためです。

見学終了後、記念の集合写真を撮り、名残を惜しみながら牧場を立ちました。最後になりますが、八雲牧場の皆様方には、丁寧な御挨拶と、御説明を頂きましたこと、また、自主生産のレトルトビーフカレーやコンビーフ缶などのお土産も頂戴いたしましたこと、心より感謝申し上げます。



北里大学獣医学部附属
フィールドサイエンスセンター
八雲牧場
〒049-3121
北海道二世郡八雲町上八雲751
TEL 0137-63-4362